

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K17205

研究課題名(和文) 貧困対抗活動の生態系と福祉社会構築に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological Study on Socio-ecological Series of Social Activism Combating Poverty for Construction of Welfare Society

研究代表者

西川 知亨(NISHIKAWA, Tomoyuki)

関西大学・人間健康学部・准教授

研究者番号：50582920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：国内の多様な貧困対抗活動について、「ネットワーク系 草の根連帯経済系 グリーン/アース系 ソーシャル系」に整理した。そのうえで、社会生態学の観点を活用しながら、個人的/社会的レジリエンス(人々の社会生活を柔軟に再組織化していく力)を生む作用について考察した。そのなかで、人と社会を取り結ぶ方法として、社会的に再検討したソーシャルワークおよびその教育法が有する福祉社会構築への可能性について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1に、それぞれ独立したディシプリンとしてとらえられてきた、社会学(社会学史)と福祉(社会福祉学)の架橋という、研究領域の未開拓性にある。第2に、研究代表者が練成(elaboration)を行ってきたシカゴ学派の総合的社会認識の観点から着想を得た生態学的過程の枠組を採用するところに特徴がある。第3に、実証科学としての社会学から、実践学問としての社会福祉学を横断するなかで、現代の福祉社会の構築に資する研究と活動の方向性を示した点にある。

研究成果の概要(英文)：This study organizes various social activism combating poverty in Japan into 1. Network series, 2. Grass-rooted Solidarity Economy series, 3. Green /Earth series, 4. Social series. This study examines the individual and social resilience (power of reorganizing human lives and societies flexibly) from the perspective of social ecology. This study realizes the possibilities of social work and the method of its education for construction of welfare society.

研究分野：社会学

キーワード：貧困 社会活動 社会生態学 福祉社会 レジリエンス シカゴ学派 ソーシャルワーク

1. 研究開始当初の背景

日本社会は、2008年には世界金融危機による余波(派遣切り)、2011年には東日本大震災を経験し、多くの人々の生活解体が問題となった。その一方で、昨今は路上生活者の数は減少し、貧困の問題も以前に比べれば、「一段落」したという声が聞かれている。しかし、他の多くの福祉の現場の声に耳を傾ければ、公的な社会制度や市場などから見ればマージナルな立場にいる人々からは、今だ悲痛な声が聞かれる。路上生活者数の減少、自己責任論の軽減など貧困に対する社会意識の変容、また、今だ悲痛な実情が明らかになっているのも、実は、国内で展開されている貧困対抗活動が一定の役割を果たしている。だが、一般社会にはそのことはあまり認知されていないばかりか、社会問題を把握するためには、社会的反作用を把握すべきだと考えるデュルケム学派やシカゴ学派を除いては、社会活動が、社会的レジリエンスに影響を及ぼす側面について十分に評価していたとは言い難い。

貧困対抗活動と一言で言っても、実際には多様性があり、それぞれの活動の意義は、それぞれ全く異なっているように思われる。時に、ある系統の立場から、他の系統に対する批判が展開されることもあるが、「貧困脱却に資する/しない」という2項対立では、それぞれの系、あるいはそれぞれの系の相互作用が生み出す社会的レジリエンスは看過される。様々な理由で、2008年以降に生まれ、しかし評価されないまま終息を迎えた社会的起業も少なくない。成功事例/非成功事例も含め、人と環境の相互作用という社会(生態)学の基本命題に立ち返り、現代的に方法論的修正をしつつ行う研究調査が必要である。

2. 研究の目的

本研究で明らかにするのは、主に次の3点である。

1. 貧困対抗活動の生態系におけるそれぞれの系から創発する個人的/社会的レジリエンス
ネットワーク系、草の根連帯経済系、グリーン/アース系、ソーシャル系、のそれぞれの系は、貧困問題の解決という共通した目的を明示しているも、社会学的に評価してみれば、それぞれ異なる社会的意義を有している。本研究においては、それぞれの系が明示する顕在的意義と、非明示的な潜在的意義、つまり社会生態学における個人的/社会的レジリエンスを、学説史の遺産に裏付けられた理論、および社会学的方法論にもとづく調査によって明らかにする。
2. 貧困対抗活動の生態系のそれぞれの系の間での相互作用および融合により創発する個人的/社会的レジリエンス

社会生態学的に見れば、それぞれの系では「圏域的なセグレーション」が生じているために、それぞれの系の間では、協働関係が促進されているところもあれば、あまりなされていないところもある。しかし、2010年代初頭から半ばごろまでの状況を鑑みれば、異なる系の間での協働関係が観察できるようになってきたことを踏まえ、反貧困活動等の貧困対抗活動の創発時にはなかった個人的社会的レジリエンスの可能性について、社会生態学の自然史(natural history)の観点などから明らかにする。

3. 社会的反作用としての貧困対抗の諸活動群が示す新たな福祉社会構築へのインプリケーション

社会福祉学や福祉社会学においては、近年の社会活動は「ソーシャルアクションアプローチ」ととらえられており、「エコロジカルアプローチ」とは異なるものとしてとらえられている。そればかりでなく、社会学の遺産を軽視する潮流のもとで、社会活動や社会生態学の意義をとらえそこなっている。この現状を踏まえて、社会的反作用・コントロールがもたらす個人的/社会的レジリエンス評価について、シカゴ学派の総合的社会認識、社会生態学に基づいて明らかにする。つまり、あらゆる系の個人的/社会的レジリエンスを、折衷(eclectic)ではなく絡み合わせ(entanglement)により理論構築する。これにより、あらゆる立場に立つ人々の福祉を追求した、新しい社会生態学的観点に基づく新たな福祉社会を提案する。

3. 研究の方法

本研究の研究対象/フィールドは、先の目的遂行のために示した研究概要に即して、ネットワーク系、草の根連帯経済系、グリーン/アース系、ソーシャル系、の4つの系に分類される貧困対抗活動とする。方法としては、フィールドワーク、参与観察をとまなうインタビュー調査、それぞれの系に関する文献・映像資料(ドキュメント)調査、および申請者が調査をおこないながら協力している活動団体の諸資料の検討をおこなう。シカゴ学派の総合的社会認識の実践として、「時間 空間」「科学 政策」だけでなく、「ボランティア ビジネス」「当事者近接的 当事者遠隔的」などの両極および各種データを、単なる折衷(eclectic)ではなくて、三角測量(triangulation)/絡み合わせ(entanglement)により評価・分析する。

4. 研究成果

(1) 日本における貧困対抗活動は、ボランティアを強調するものがあれば、ビジネス志向のものもある。また、貧困「当事者」との距離が近いものもあれば、必ずしもそうではないものもある。活動の実態を踏まえ、ネットワーク系、「草の根」連帯経済系、グリーン/アース系、ソーシャル系、の4つの理念的な活動群に整理した。この類型は、以下のプロセス等を経て構成された。貧困対抗活動において問題とされる焦点は、第1に「当事者」との関係がいかに取り結ばれているかという課題である。第2に、活動が継続性をもたせるために、いかに「持続可能性」を確保するかという問題である。下記の(2)ともあわせて、『変化を生きながら変化を創る』(北野編, 法律文化社, 2018) 所収論文(拙著)の問題系である。

(2) 「貧困対抗活動の生態系におけるそれぞれの系から創発する個人的/社会的レジリエンス」および「貧困対抗活動の生態系のそれぞれの系の間での相互作用および融合により創発する個人的/社会的レジリエンス」の問題系から、「社会的反作用としての貧困対抗の諸活動群が示す新たな福祉社会構築へのインプリケーション」の問題系へと調査研究を進めていくなかで、ソーシャルワークおよびその教育法の可能性についての問題系へとシフトする研究の意義が浮かび上がってきた。その研究のなかで、貧困対抗活動の生態系論は、ソーシャルワークに関する二分法の「総合」の具体的な事例を豊饒に含むことに気づいた。たとえば「ネットワーク系」における「社会問題と自己責任論」などの二分法の総合などである。「ボランティア志向-事業志向」の軸、および、「当事者近接的-当事者遠隔的」の軸を基本とし、各系統の活動の意義(個人的・社会的レジリエンス)を浮かび上がらせるなかで、傾聴などの福祉方法論と批判的検討による調査を通じて、ソーシャルワーク論に役立つ二分法の総合の具体的な事例を引き出してきた。

(3) クリティカル・リフレキシビティから総合的社会認識の生態学理論への道筋を立てることができた。社会福祉実践における生態学的方法は、「エコロジカル・アプローチ」として知られている。そこでよく言及されるのがC. B. ジャーメインらのアプローチであるが、本研究においては、福祉社会の構築、たとえば本研究の半ばで設定したソーシャルワーク教育の社会学的検討という問題意識のもとで、二分法を総合してワーカーの視野の拡大を可能にする可能性のあるシカゴ学派の社会生態学を活用することを試み、いわば、「もうひとつのエコロジー理論」の構築を目指した。ソーシャルワーカーが、一元的価値から脱却した支援を可能にするために、自己のみならず「社会」を把握するために必要となる方法や視点としては、クリティカルシンキングやリフレキシビティが考えられるが、本研究においては、社会問題の要因・背景の所在を、個人から社会へとシフトする社会イメージづくりとして役立つものとして、初期シカゴ学派の人間生態学のパースペクティブを検討した。その結果、シカゴ学派社会学から分離していった福祉実践について、現代における両者の接合可能性を提示することができた。

(4) 福祉におけるソーシャルワーク教育が軽視しがちであった相互作用 文化 社会制度の問題系において、「相互作用 文化」の側面については、E. ゴフマンのドラマトウルギー論(社会的相互作用論、相互作用秩序論)を文化社会学の観点から再検討した。これについては、『映画は社会学する』(西村・松浦編, 法律文化社, 2016) 所収論考(拙著)において扱っている。また、「文化-社会制度」の側面については、生活困窮者支援の現状と課題の考察を進めるなかで、生活困窮者支援をめぐる背景、貧困問題の「見えない化」と「見える化」、生活困窮者自立支援制度とその問題、および民間団体との連携の各課題について検討した。これについては、『よくわかる社会保障』(第5版)(坂口・岡田編, ミネルヴァ書房, 2018) 所収論考(拙著)において扱っている。

(5) 『オトコの育児 社会学』(工藤・西川・山田編, ミネルヴァ書房, 2006)もまた、本研究における福祉社会の構築に関する研究成果のひとつである。その企画において、総合的社会認識の社会学を活用し、二分法の総合に関して留意した。また、他の編者および執筆者と協力しながら、個人の実感と「社会」が結びつくような記述に努め、単なる制度の紹介にはしないことに留意した。「ソーシャルワーク教育は失敗」とまで指摘するソーシャルワーカーの声もあるなかで、福祉教育の問題点を乗り越え、よりよい福祉教育を構築しようとする形になっている。たとえば、家族福祉は利用者と生活環境をみる「エコマップ」を作成するが、「エコマップの向こう側(マクロな社会変動など)とこちら側(人々の意味づけ・経験や相互作用秩序)」についてはあまり注意を払わないという問題の指摘をすることができた(上記(4)も参照)。これは、初期シカゴ学派の金字塔『ポーランド農民』で展開された「社会変動と個人の経験」の相互作用の考え方も共鳴している。その他、「近代家族と現代家族」「ワークとライフ」(ワークライフバランス)などの二分法を総合する「個人と社会」の「社会学的想像力」の展開を行った。

(6) 上記に関連して、総合的社会認識の社会学を、ソーシャルワーク教育に活用する問題設定を行うことができた。総合的社会認識の社会学を活用したソーシャルワークは、社会学的想像力と社会調査という社会学の2つの道具によって具体化される。本研究ではその補助線として、とくにシカゴ学派の社会生態学の観点を検討した。支援者が総合的社会認識をもつことで、問題

発見能力を高め、社会関係の圧力を相対化し、コントロール法を考案することができる可能性がある。視点のシフトにより、広い視野を獲得し、自己責任論から解放されるという効果も期待できる。支援者と被支援者の関係性についても、相互作用に注目して見ていくことによって、新たな発見がある。たとえば私がこれまでの論文等で言及している「役割の柔軟性」についてなどである。社会福祉士養成などの福祉教育における社会学（「社会理論と社会システム」科目）の意義についても、総合的社会認識のソーシャルワークという観点から見直されてよい。こうした視点からの教育は、これからのソーシャルワーカーに広い視野をもたせるという効果がある。場の力とそれが見えなくしているものに気付くためには、ミクロとマクロを往復する想像力と調査力が必要となる。これからのソーシャルワーク教育として、（ソーシャルワーカーに限らず）あらゆる人が、人と社会をつなぐソーシャルワークの手法を活かし、現代社会を生き抜く武器を獲得するような教育が目指されている。

（7）国内外において、ソーシャルワークについて、社会学と社会福祉学の方法論を横断し「総合」する試みはまだ端緒にすぎたばかりである。そのなかにおいて、本研究の内容をあらわすものとして「社会的ループと社会福祉学的ループ」の概念図を作成した。社会学分野は、デュルケムらの伝統の下、実証科学であることを重視してきた。多くの研究は、「理論と実証」の往復によって研究調査が進められる。それに対して、社会福祉学分野は、比較的实践を重視してきた。この特徴の一方では、利用者支援において大きく貢献してきた。しかし他方で、ともすれば特定の価値観や単一の方法論に基づく実践となってしまうところもあり、分析概念が局域的であることや社会構造の問題を看過してしまうという問題が指摘されてきた。

本研究は、社会学と社会福祉学の両者の方法論の二分法の総合の可能性を探るものと位置付けることができる。社会学史を修正活用した【理論】と【実証】を往復する社会的ループ、およびエビデンスを重視する【実証】と「【教育】【実践】」を往復する社会福祉学的ループを活用し、両者を絡み合わせる（entangle）「総合」的研究を志向することで、いわば、「総合的社会認識の社会学を活用した福祉実践」が可能となり、現代の福祉社会の構築に資するものと考えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西川知亨	4. 巻 64 (1)
2. 論文標題 【書評】巽真理子著『イクメンじゃない「父親の子育て」 現代日本における父親の男らしさと ケアとしての子育て 』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 140-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西川知亨
2. 発表標題 人と社会をむすぶソーシャルワークを社会的に再検討する 総合的社会認識の福祉教育の可能性
3. 学会等名 関西大学人権問題研究室（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西川知亨
2. 発表標題 貧困対抗活動の生態系と福祉社会 個人的 / 社会的レジリエンスの観点から
3. 学会等名 日本社会学会第88回大会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 北野雄士・山本哲司・岡尾将秀・川田美紀・菊地真理・安元佐織・太田美帆・西川知亨・景山佳代子・曾我千亜紀・内海博文	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 208
3. 書名 変化を生きながら変化を創る 新しい社会変動論への試み	

1. 著者名 坂口正之・岡田忠克・梓川一・石田慎二・金子充・金圓景・神島裕子・齋藤立磁・栄セツコ・澤田有希子・玉井良尚・寺本尚美・西川知亨・西村貴直・狭間直樹・平野寛弥・藤澤宏樹・包敏・松本しのぶ・山縣文治・涌井忠昭	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 よくわかる社会保障 [第5版]	

1. 著者名 工藤保則・西川知亨・山田容・今村光章・阿部真大・加藤裕康・木島由晶・木村至聖・上月智晴・阪本博志・高山龍太郎・阿形健司・竹内里欧・片岡佳美・近藤真由子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 268
3. 書名 オトコの育児 の社会学 家族をめぐる喜びととまどい	

1. 著者名 西村大志・松浦雄介・野中亮・西川知亨・丸山里美・赤枝香奈子・坂部晶子・工藤保則・井上義和・近森高明・今田絵里香・木村至聖・岡崎宏樹・菊池哲彦・野村明宏・竹内里欧・阿部利洋・阪本博志・多田光宏	4. 発行年 2016年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 256
3. 書名 映画は社会学する	

1. 著者名 黒田研二・狭間香代子・岡田忠克・山縣文治・西川知亨・森仁志・涌井忠昭・所めぐみ	4. 発行年 2017年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 216
3. 書名 現代社会の福祉実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

現代家族における「オトコの育児」を探る 子育てしやすい社会の実現に向けて
http://www.kansai-u.ac.jp/reed_rfl/archive/52_1.php

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----